

テッポウユリの再出芽発生に関する研究

(第1報) 発育過程における再出芽の発生

松川時晴・*吉田徹生・**吉田博美・**中村新一

(福岡県立園芸試験場 *福岡県農業技術課 **福岡県宗像農業改良普及所)

MATSUKAWA, T. YOSHIDA, T., YOSHIDA, H., and NAKAMURA, S.

Studies on the Growth and Development of Secondary Sprouted (Summer-Sprouted) Bulbs in *Lilium longiflorum* Thunb. cv. Hinomoto.

(I) Bolting Response of Secondary Sprouted (Summer-Sprouted) Bulbs in the Developmental stage.

テッポウユリの球根生産過程において、再出芽が発生した場合には分球して不良球を生じ球根の生産性を低下させる。そこで、再出芽の発生、発育過程とその形態および植付時期の影響について調査したのでその概要を報告する。

試験Ⅰ 再出芽の発生、発育過程とその形態

試験方法 供試球は福岡県宗像郡産“ひのもと”のりんべん1作した8g球を用い、1974年9月27日に宗像郡玄海町の砂土に株間10cm×25cm、深さ6cmに植え付け、2週間ごとに掘り上げて分解調査した。

結果 地中における発芽は植え付け4週間目に認められ、6週間目にはすべての球根に地上部へのほう芽および子球の形成が認められた。さらに、8週間目には再出芽の発生を認めた(第1図)。再出芽の発生はりんべん葉が発生し、ある期間を経て茎の伸長を始める型とりんべん葉の発生をみることなく茎の伸長を始める型の2つの様相が認められた。

球根には再出芽が発生したものと発生しないものが認められ、その成因によって次の4つに分類した。

I型 再出芽、分球ともに発生しない=正常球

II型 再出芽を発生せず分球した=分球

III型 再出芽を発生したが分球しない=不良球

IV型 再出芽、分球ともに発生した=不良球

試験Ⅱ 植付時期による再出芽の発生

試験方法 供試球は福岡県宗像郡産“ひのもと”のりんべん1作した5g球を用い、1975年9月5日、9月26日、10月17日および11月8日に試験Ⅰと同様に植え、3週間ごとに掘り上げて分解調査した。

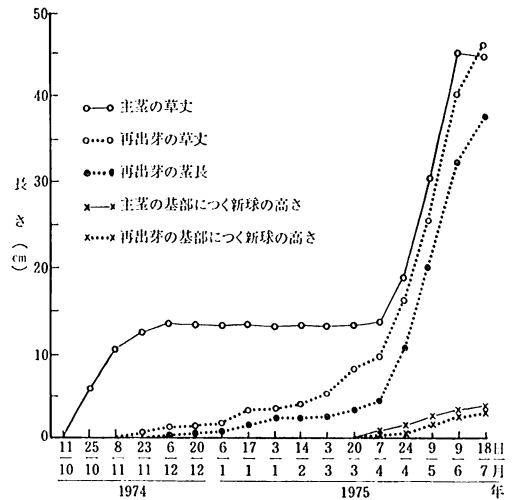
結果 主茎の伸長は9月および10月植えの各区では発芽後、急速に伸長して地上部へほう芽し、4~5葉が展

葉するとともに子球の形成を認めたが、11月植え区では発芽後の伸長は遅く、子球の形成を認めたのは3月3日であった。再出芽の発生は9月植え区では12月12日に認められ、その発生率は高いが、10月植え区では9月植え区より2か月も遅れて12月12日に始まり、その発生率も極めて低率であった。さらに、11月植え区では発生が認められなかった。

要 約

再出芽の発生には2つの様相が認められ、球根の形成には4つの形態が認められた。

また、再出芽の発生は9月植えに比べ10月植えでは著しく遅れ、発生率も極めて低下した。さらに、11月植えでは発生が認められなかったことから、植付後の温度の影響が大きいと推察される。



第1図 主茎、再出芽の草丈および新球の成長